〈おわりに〉

復旧を終えて

管理部長　長谷川　守

この度の震災で被災されました方々に心からお見舞い申し上げますと共に、各方面より暖かいご支援を賜りましたことに対して厚く御礼申し上げます。

誰しもが予想だにしなかった今回の地震により近代都市神戸は破滅状態となり、市民生活は根底から覆ってしまいました。

永年勤務し、思い出多い神戸製鋼本社も今は何も残っておりません。

神鋼病院は昨年5月偶然にも現在地に新築移転しておりましたので、被害も最小限度にくいとめられました。しかし、壁には亀裂が入り配管はズタズタ、水、ガスもない状態で再び「大震災が起きる」と言う噂が拡がり、強い余震が続く中現実味を帯びてきて病院は本当に復旧することが出来るかと大変危惧したこともありました。この様な状況下「今何を成すべきか」院長の決断は的確で迅速でありました。

1. 患者さんを無事に転院させること
2. 従業員の健康管理を図ること
3. 病院の設備、機器を早期に復旧すること

これを実行するにあたっては全社の全面的な協力が必要でありますが、本社各関連部門の尽力により達成することが出来ました。

食糧品から簡易シャワー、社内救急車による患者搬送、有馬くろがね荘の宿泊利用による看護婦の疲労解消、又一方大林組殿を核とした工事関係各社の大災害勃発以降連日連夜「病院の早期復旧」の掛け声のもと懸命の努力を続けていただき、4ケ月という非常に短い期間で復旧工事を完了させて頂きました。

皆様方のご協力に村し喪心より感謝申し上げます。

我々病院従業員も被災されました従業員及びその家族や協力会社の皆様方の健康保持と早期治療を行うことは無論のこと、地域の基幹病院としての役割を果たすことが使命であると考え懸命に努力して参りました。

医師、看護婦による避難所へ24時間駐在してボランティア活動や社宅、独身寮への巡回診療などがその一例であります。大災害に対するトレーニングも皆無の中で、皆が闇雲に飛び込んで無から何かを掴むことが出来たとすれば、それは貴重な体験となり今後の人生に大いに役立つことと思います。

本院としてもこの教訓を生かし、この様な事態が発生した時の為に十分な対応が出来る様対策を講じております。

今回の震災は歴史的にみても特筆すべきものであり、大都市災害における幾多の経験は後世に真実を伝える意義は大きいと思います。

これは「阪神大震災時神鋼病院の対応の記録」と題して、本院の震災から復旧までをまとめたものであります。

(c)1995神綱病院(デジタル化：神戸大学附属図書館)